

東アフリカ高地におけるアグロフォレストリーの発展手法の開発

Methods for developing the agroforestry in East African Highland

佐藤 靖明(SATO Yasuaki)

一つの畑の中に樹木と樹木以外の農作物を混植する「アグロフォレストリー」という栽培システムは、作物生産性向上、生態系保全、砂漠化防止など多くの効果が見込まれており、世界的に注目されている。しかし、このシステムを社会の中で維持・発展させるための方法論はまだ確立されていない。

本研究課題は、東アフリカ高地におけるバナナ栽培を基盤としたアグロフォレストリーの発展にかんして、住民の植樹活動を活発化させるための方法を考えることを目的としている。ここではとくに、近年みられる住民組織化の動きと食品栄養価の在来知・科学知に注目する。

平成 28 年度は、ウガンダの中部と西部の農村において現地調査をおこなった。まず、それぞれの地域でバナナとの混植に適する樹種が異なることを聞き取りおよび観察で確認した。また、以下のことを明らかにした。

(1) 苗木の配布と栽培試験の有効性

本課題を開始する以前から行っていた苗木の配布と栽培試験について、住民に意見を聞いた。その結果、この手法は農家の主体性に対する配慮が必要であるものの、樹木栽植への関心と知識を高めることができ、農村への波及効果が高いことが分かった。また、苗木の配布は金品の授受とは異なり、彼らの間で不平等感を生み出す問題が少なく、住民間や住民—研究者の間で、従来顕在化することがなかった知識や意見をスムーズに交換できる環境がつくられることが分かった。なお、栽植樹種に関しては、特定の食用果樹がとくに好まれることが分かった。

(2) 住民組織化の動き

ウガンダ中部の農村では、近年小規模な互助組織が多く設立されていることが分かった。15名に聞き取りをした結果、1つの村内で人数が5名から25名までの22グループの存在が明らかになり、しかも半数以上は2011年以降につくられた新しいものであった。グループの活動目的は、集めたお金を交代で一人が受け取る「頼母子講」や、販売ビジネス推進などがあり、最も多いのが、メンバーの親族の死去時における金銭・食料・労働力の提供である。このような動きの背景には、慣習的な相互扶助のしくみが失われつつある中で、生活の各方面において世帯間で協力しあう必要性が増してきたことが考えられる。これまでに、世帯への苗木の配布前に誰がどのように苗床を管理するのか、という問題が指摘されていたが、このような小規模な住民組織に運営を任せることが、この地域に根差して植樹活動をすすめる上で有効であると考えられる。

(3) 食と栄養に関する知見

中部と西部の農村において、幼稚園・小学校の教諭に、子どもの食と栄養に関する聞き取りをおこなった。その結果、栄養に関する教育は理科の一環としておこなわれるものの、全体のカリキ

ユラムの中ではあまり時間が割かれていないことが分かった。食への嗜好と植林は結びつきやすいが、それに関して、子どもへの食の教育という観点も、植林という長期的なタイムスパンを考えたときに重要であることが示唆された。